

ない。時には葉下面に毛が全くなく淡緑色で腺点だけあるものがあるが、これは若い個体や勢の弱い枝に見られることは武田博士 (1943) が指摘された通りである。樺太からミドリイソツツジ (*L. glandulosum* Nutt.) の名で記録されたものもこのような形で、北米産とは直接関係がない。

これらイソツツジ類は欧亜に分布する *L. palustre* L. より葉が広いことから、一時北米やグリーンランドに分布する *L. groenlandicum* Gunnerus (1766) にあてられたが、後者は 5-8 本の雄蕊をもち、葉の先は円く下面の褐綿毛は中肋まで完全におおいかくし、花梗には細立毛が多く腺は目立たず、染色体は $2n=26$ であり、アジアには産しないものと考えられる。極東のイソツツジ類は雄蕊は 10 本、葉下面の中肋は毛が生えていてもはっきり見え、花梗には細毛と腺があり、これらの点では *L. palustre* の方に近く、またその染色体数も $2n=52$ (未発表) で *L. palustre* と一致する。したがって極東のイソツツジ類は *L. palustre* の広葉をもった地理的亜種と考えられ、その場合の学名は subsp. *diversipilosum* (Nakai) Hara (1956) である。

しかしもしイソツツジ類を独立種として扱う場合には *L. hypoleucum* Komarov (1916) が正名となろう。近年 (1953) カバフトイソツツジやエゾイソツツジ型のものに *L. macropphyllum* Tolmatchev, またイソツツジ型に *L. nipponicum* の種名があたえられたが、これらは明らかに *L. hypoleucum* と同一種中の変異と思われる。Tolmatchev は *L. groenlandicum* (*L. latifolium* Aiton を用いている), *L. macrophyllum*, *L. nipponicum* を ser. *Latifolia* Tolm. にいれ、*L. hypoleucum* を別の ser. *Hypoleuca* として分類しているがこれには賛成できない。

ここにもう一つ問題になるのはアラスカ南端 Sitka から記載された *L. pacificum* Small (1914) で、雄蕊も 10 本と書かれ、分布に日本が引用され、Rehder (1940 & 49) はイソツツジ系の異名としているが、Hultén (1948) によればこれは *L. groenlandicum* と同一であるという。

□ Eric Hultén: **The circumpolar plants, 1.** Kungl. Svensk. Vetens.-Akad. Handl. Fjärd Ser. 8 (5): 275 pp., 228 maps. 1962 著者が多年にわたって手がけた北半球を中心に分布する高等植物について、北極を中心に北回歸線まではいった基地図の上に、1 種ごとにその産地を示したものである。1 集にはシダ植物・裸子植物・単子葉植物 228 種がふくまれ、彼独自の分布型によって分けて配列してある。種の範囲は大きくとられ、まれには属として 1 図にまとめている。広分布種もふくまれエノコログサのような雑草的なものまでいれてある。日本というようなせまい地域だけを見ると不十分な点も見られるが、全世界にわたってこのような分布図を作ることは実に大変な仕事で、Hultén 博士のような多年の経験と絶大な精力をもつ人でなくてはとうていできない労大作である。植物地理学上の重要な資料として今後長く役立つことと思う。

(原 寛)